

2021年度永年勤続25年表彰について

2021年10月14日
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）は、10月14日に、東京都立川市において、永年勤続25年の表彰式を、新型コロナウイルス感染症対策を実施の上、下記のとおり開催しましたので、お知らせいたします。

記

1. 日 時 2021年10月14日（木） 11:00～12:00
2. 場 所 パレスホテル立川（東京都立川市）
3. 受賞者 17名

渡辺郁夫理事長が表彰式で受賞者に表彰状を手渡した後、永年勤続の労をねぎらうとともに、今後の活躍を期待するとのあいさつがありました。理事長のあいさつを受け、受賞者を代表して人間科学研究部 安全心理 室長 斎藤綾乃が答辞を述べました。



表彰状を手渡す渡辺理事長と受け取る受賞者

【理事長あいさつ要約】

永年勤続25年表彰の受賞おめでとうございます。本日、このようにお祝いできることを大変うれしく思います。

皆さんが鉄道総研に入社した1996年は、JR発足10年目の節目の年に当たり、JR各社が民営化後の様々な施策を打ち出していた時期でした。JR西日本が株式上場を行った年でもあります。

鉄道総研では、超電導リニア関連では山梨実験の先行区間の工事が終了し、走行試験に向けた準備が進められていた時期です。また、鉄道事業者等が会員となる鉄道技術推進センターが発足して、技術基準の原案作成を所管するとともに、鉄道設計技士試験が初めて実施されました。さらに、大型低騒音風洞が竣工して低騒音パンタグラフの舟体に発生する揚力や空力音の低減効果の実験などに活用されました。

このような時期に、皆さんは鉄道をもっと良くしようという気概をもって鉄道総研に入社されました。その後25年間、研究開発をはじめとする業務に精励され、自分の仕事のスタイルを固めつつ、鉄道総研の活動を支え、また、成果をあげてこられました。これまでの皆さんの頑張りに改めて感謝いたします。

さて、現在はコロナ禍でかつてない厳しい状況にあります。 「革新的な技術を創出し、鉄道の発展と豊かな社会の実現に貢献する」という我々の志は変わることはありません。本日の永年勤続25年表彰を一つの通過点として、それぞれの立場で力を発揮されることを期待いたします。何事も前向きに、仕事には楽しく取り組んでいってほしいと思います。

皆さんのこれからの活躍とご健勝を祈念して私からのお祝いのあいさつと致します。



あいさつする渡辺理事長

【受賞者代表答辞要約】

本日は、私ども 17 名に永年勤続 25 年表彰を賜り、誠にありがとうございました。この 25 年の間、鉄道総研は、鉄道の安全性、信頼性、利便性、快適性の向上に貢献してきました。中でも私どもは、車両の強度や、内装、振り台車、FGT、浮上式鉄道、構造物の耐震設計や維持管理、信号システムの安全性向上、さらには匂いやデザインといった人間科学に関する研究に従事してまいりました。また、企画や総務、経理、知的財産等の運營業務にも携わるとともに、海外派遣等を通じて高度な技術力の習得や鉄道総研の国際的なプレゼンス向上に努めてまいりました。私どもの努力が、鉄道の安全・安定輸送や鉄道総研の運営に、いくばくかの貢献をなし得てきたことは、大きな喜びであり、誇りでもあります。

一方、鉄道を取り巻く環境は、新型コロナウイルス感染症拡大により急激に変化し、過去に類を見ない厳しい状況にあります。自然災害の激甚化や、就労人口の減少もこの 25 年間で進んでいます。困難な状況の中で鉄道を維持・発展させるために、業務の無人化・省力化などによる新しい鉄道システムの在り方を検討していかねばならない状況となっています。さらに、低炭素化や自然環境への配慮や、国際協力への取り組みもより一層求められています。これらの課題解決に向けた革新的な技術の創出は、公益財団法人としての鉄道総研の責務であります。鉄道界や社会からの負託にスピーディに応えるべく、デジタル化など技術の急激な変化を捉え、鉄道技術の最先端を担う存在であり続ける必要があります。さらに、災害や事故等の原因究明や対策提案は、鉄道全般に及ぶ深い知見を蓄積し、技術的良識に基づく中立的な活動を行う鉄道総研ならではの、重要な社会的役割です。

鉄道総研では、基本計画「RESEARCH 2025」の 2 年目に入りました。私どもは、これまで積み上げてきた個々の専門性と、分野を横断した総合力を発揮し、「今までのやり方にとらわれることなく柔軟に」業務に取り組み、同期一同、これからも精進してまいります。

本日の永年勤続 25 年表彰を機に、私どもに課せられた使命を今一度、肝に銘じ、鉄道総研の一層の発展と社会への貢献に向けて、今後とも業務に精励することを誓い、お礼の言葉とさせていただきます。



答辞を述べる斎藤室長